

お伽草子「天神本地」ノート(一)

—本文系統推定作業報告—

村上 学

「天神本地」は、いわゆる本地物のお伽草子の一つである。この作品は平出鏗二郎氏が「近古小説解題」で

「天神本地」と題して二巻本を紹介された(実は刊本の紹介である)まま、あまり注意する人もなく、笹野堅氏が「室町時代短篇集」に「てんしん」を翻刻され、横山重氏が「室町時代物語集」に彰考館本絵巻、「てんしん」、慶安整板本を翻刻、数本を紹介されるまでは、野村八良氏の「室町時代小説論」にさえ登場していない。それ以後も、単独の論文としては荒木良雄氏の「北野天神縁起絵巻」からお伽草子「てんしん」まで⁽¹⁾ および、赤井達郎氏の「天神縁起絵巻の終焉」⁽²⁾、中島馨氏の「天神縁起の中世以後の展開」⁽³⁾の三論文が知られているだけである。それらはそれぞれ貴重な示唆を与える好論文ではあったが、諸本全体の系統を論じたものではなかった。ここでは、荒木氏の論文の発表された後に世に出た諸本を手がかりに、各本の系統、および、そ

れらの生成の問題にふれてゆきたいと思う。

まず、諸本の書誌の概略を記す。

(1)天理図書館蔵絵巻二軸(略称、天理二巻本)内題、「天神のゑんぎ」、箱付。

「室町時代物語類現存本簡明目録」(松本隆信氏)に記載されていないもの。箱の蓋の裏に「書一条関白兼冬卿筆、絵土佐千代女光久筆」と記してある。もとより信をおき難いが、時代はあたつていのではないかと思う。

(4) 絵は全十五図。淡彩でやや粗いが、違者である。なお本文は「伝承文芸資料」第一集に翻刻した。

(2)村口四郎氏旧蔵絵巻一軸(略称、村口本)内題等佚亡。(錯簡残欠本)

「簡明目録」に「室町末江戸初間」として紹介されたもの。昭和三十七年の京都古典会に出品された。縦三十・六厘、全八紙、十図が残つている。錯簡を正した場合、巻首約千五百字、配流部分約三百字の脱文がある。

絵は(1)と同じく比較的淡彩で、構図が(3)の整板本と酷似したものが多いことは、本文の類似とともに注意される。(3)慶安元年刊整板本二冊(略称、刊本)内題、「天神本地」

室町時代物語集第一に横山重氏が翻刻されているが、その本は焼失した。東洋文庫本は元刷であるが合綴され、茶色艶出無地の表紙に「天神の御本地」なる書題簽が貼つてある。なお、物語集第一に紹介された菟角文庫蔵の後刷本は現在天理図書館蔵。また、明治の初期かと思われる後刷本がある。発行所は「大坂書肆、藤屋、田村九兵衛」とある。(架蔵)

(4)村口四郎氏旧蔵絵巻一軸(略称、村口小型本)(巻頭欠)(箱入)

縦十七種。年記なし。首約五百字を欠く。絵は十三箇所ほど。拙画であるが、図柄は他本と大いに異なる。この種の小型絵巻は、赤井氏が「奈良絵本について」において述べられたところであるが、奈良絵本の原型となるものであり、(5)同系統の本文を持つ奈良絵本「てんしん」の存在からも注目される。

(5)長谷川巳之吉氏旧蔵奈良絵本二冊(略称、長谷川本)、題簽「てんしん」

不定形であるところから、初期奈良絵本の代表的遺品とされ、その成立を「おおよそ天正・慶長の頃」と考えて居られる。(8)

この本には錯簡があり、それから判断すると、「天神記をかなり忠実に写した」とする赤井氏の説には従えないまでも、(9)原絵巻に近いよい写本である。ただ、最後の一、二丁が欠けている。

(9)東京大学図書館蔵奈良絵本一冊(略称、東大本)「天神の記」(表紙中央に朱書)(下冊欠)(渡部文庫旧蔵)本文は京大本とほとんど一致するが、絵柄はやや異なる。典型的な、整つた奈良絵本で、精密、豪華であるが、京大本の自由器違さはなくなっている。

(10)天理図書館蔵奈良絵本二冊(略称、佐佐木本)題簽「天神由来」(王道文庫、竹柏園旧蔵)

絵は濃彩であるが、簡略化された粗末なもので、いわば大量生産型の奈良絵本である。本文も、現存本中もつともくずれたもので、錯簡は京大本と一致する。

以上の十本のほか、「天神本地」の写本は多いと思われる。たとえば、^(追記)広島大学文学部に近世初期の写本があるとの事であり、「中世小説の研究」(市古貞次博士)

室町時代物語集、室町時代短篇集所収。本文は(4)の村口小型本に近い。

(6)天理図書館蔵絵巻一軸(略称、天理一巻本)題簽、内題、尾題等なし。

松本氏は「簡明目録」で室町末期と推定して居られる。挿絵十四図。濃彩、金箔をも使用した豪華なものではあるが、奈良絵風の拙劣なものである。横山重氏が「神道物語集」で、「これは室町末ごろの作らしいが、いはゆる天神記にくづれたものの中では、今まで見た中で一ばん古く、一ばん良いものである。」(6)と紹介して居られる。現状は痛みが大きい。

(7)彰考館旧蔵絵巻一軸(略称、彰考館本)題簽「天神記」内題「天神」(戦災焼失)

室町時代物語集第一に翻刻。文化十五年ごろの写であるが、原本は赤井氏の推定では、室町時代中ごろの成立とされる。(7)原本の存否は判っていない。

(8)京都大学国文学研究室蔵奈良絵本一冊(略称、京大本)題簽「かむ悉柑」

室町時代物語集第一に一部分彰考館本のイ本として引かれている。赤井氏が「終焉」で紹介された本である。氏は、詞書が絵の書いてある丁まで書かれ、スヤリ霞が

中にも、右のどれにも属さない本文が引用されている。

また、単独の本とはなっていないが、秋月物語(矢野本、室町時代物語集第三に翻刻がある)に安楽寺にまつわる縁起説話として紹介されているものがある。管見にふれたお伽草子には、この他に「天神本地」系統の説話を全体的にのせるものはなく、またこの挿話はかなり詳細なものであるから、これも考察の対象にしたいと思う。

右の十本中、(3)、(5)、(7)、(8)、(9)、(10)については横山氏が室町時代物語集第一の解題で(7)、(10)、(5)、(3)の三類に、松本氏が「簡明目録」で横山氏の説に増補をして(6)と(10)、(4)、(5)、(2)、(3)の三類に分類されている。この分類は正しいと考えられるから、ここでは(1)と秋月物語挿話の一つにまとめ、^(追記)祖型、A、B、Cの四類に分けて考えてゆきたい。

はじめに右の類別に従つてプロットの入一覧表を次に掲げる。(異同のある場所のみ)

…ほつしやうばうまいり給ふ。Dしらかわの水D1おびたしくまさりて、御こしかきども、わたるべきやうもなし、いかゞつかまつり候べきと申せば、(くるしかるまじ、D2たごわたれ)、Cうげんのそうとして、水火たうぢやうのなんにおかざる、事やある、たごわたる事なく、こしを、ながる、水にのぞむべし、とおほせける。御こしかきどもおほひけるは、此たびのいかづちの御きたうかなふまじきとおほしめし、この川にて身をなげてうせたまひなんとするにこそと、かなしく、EなみだともE1(ちからなく)E2めをふさぎてわたりければ、水のきて、ひがたとなつてとをりたまふ。雨風も御ともの人には、E3すこしもわづらひなかりけり。

(4) 村口小型本

三どのせんじにてまいり給ふなり。(絵)かやうにあめふり、Fみづいで、かも川そやなくわたりがたしを、このほつしやうばう御くるまはたやすくとをり、Hみづはびやうぶのごとくにて、御ともものどもく、りをとかずして御さんだいありけるこそふしぎなれ。

あたらざりけり。

(8) 京大本

ほつしやうばうまいりたまふ。Dしら川の水をびたしくまさりて、御こしかきども、わたるべきやうなし、いかゞつかまつるべきと申せば、くるしかるまじ、D2たごわたれとおほせあるほどに、E2めをふさぎてわたりければ、みづのきて、ひがたとなつてとをりたまふ。雨風も御ともの人には、E3すこしもわづらひなし。(佐佐木本ほ同文)

天神縁起諸段の中で法性房渡河段はかなり有名な段で、独立して屏風絵にもなっているが、(11)この段が甲、乙、丙類本天神縁起に比べ安楽寺本系天神縁起では大きな増補をされている事は、かつて述べた如くである。(12)そして天理二巻本の本文は、その抄出本の形態をとつていたのであつた。煩わしくなるが、赤木文庫本の本文を掲げ、比較してみる。

僧正、既西坂本ニ下て、内裏に参給はんとて、A1御車飛がごとくして、麒麟より猶早ク、但、A2鴨河の洪水なめならず繼出て、漫々たる蒼海にぞにたりける。

(5) 長谷川本

いまはうらみもあらじとて(脱文アルカ)Gしやぢくのごとくなる大雨にFこすずいで、かも川さうなくわたりがたし。されども、ほつしやうばうの御車は、みづなみわかつてとをしけり。

(6) 天理一巻本

ほつしやうばう参りたまふ。Dしらかわの水D1おびたしくまさりて、御こしかき共、わたるべきやうぞなし、いかゞつかまつるべきと申せば、くるしかるまじ、D2たごわたれとおほせけるほどに、E1力なくE2目をふさぎてわたりければ、水のきて、ひがたとなつてとをり給ふ。雨風も此御ともの人には、E3すこしもわづらひなくとをり給ふなり。

(7) 彰考館本

ほつしやうばうまいりたまふ。Dしら川の水まさりて、御こしかき、わたるべきやう、さらになし、いかゞつかまつるべきと申せば、くるしかるまじき、わたれとおほせありければ、E水のきて、ひがたとなりてわたりたまふ。あめかぜものきて、かの御ともの人には

巫山峽に棹ましても、舟筏ともに通へきにあらす、鳥の翼などは、さりとて、とこえん物か。雷電きびしくして、百千の鼓をうつよりもおびたしくして、黒雲空に満ちて塞りなり、東西岸の木枝も見えず。G雨は車軸のごとくして、滝の水を落せるがごとし。一としてたすかるべき事なかりければ、鳥だにもかけらぬ体なり。何況ヤ凡夫境界、通力を委たりと云とも思よるべき様もなし。此由を御共の人々申ければ、僧正、開ぬ、汝等ゆめく、恐る、事なかれ、C1有験の僧として水火刀兵等の難におかざる、事やある、只、禪なく車を洪水に望べしとぞ仰られる。其時、牛飼、御共の人々、心中に思けるは、あはれまからぬ禍かな、C2有験も様にこそよるべけれ、昔、尺迦如来を、法輪長者の米洗ける白水に押流されて、僧伽梨衣の御袂をしほらせ給けるぞかし、況や是程の洪水に車をとほさんや、有験あるべしとおほえず、C3只今度の雷の御折かなふまじきによりて、此河に身を投て失せ給はんとするこそかなしけれと、

B各々皆思相承り。類に僧正やれくとの給ふ間、牛を既、洪水に追入けり。御車の輪既、河にひたる程に成ければ、水神の計にやありけん、洪水上下去て車

一兩通る程ぞ、洞のごとくあきて、河の底の深キは牛の膝にぞ立にける。雲を見れば大海あり。左右を見れば、洪水屏風をたてたるがごとし。(13)

便宜上、右の本文のうち二本以上に共通の本文を表にすると左のようになる。

	grp	A	B	C	D	E	F	G	H
祖 (i)	赤木本縁起	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
A	天理二巻本	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
B	刊本(村口本)	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
(4)	村口小型本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
(5)	長谷川本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
(6)	天理一巻本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
(7)	彰考館本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
(8)	京大本	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

◎はほぼ一致するもの、○は一部分省略があるもの、○は僅かながら異文を含むものを意味する。

他の個所での本文の先後の問題であり、一つは天理二巻本の本文が、A・CおよびBグループに対してどのよきな位置を示すのかの分析である。まず、前者について考えてみたい。

そもそもお伽草子本の本文が北野天神縁起の本文の類を行つたものらしいことは、いまさら証明の要がないと思う。その面でもA・C両グループのプロットを比較すると、現存Cグループの本文は、例えば天祥山の段でAグループ本文にあつた金札降下のプロットを脱したり(原縁起で祭文が昇天することから変形させられたものであろう)吐火(ザクロ)天神の位置を天祥山の段にとりこんだり(原縁起及びAグループでは法性房化現の段にあつた)して、あきらかに原天神縁起からはAグループよりも遠ざかつた形態を持つてゐる。したがつてAグループの底にしかれた本は現存Cグループより古い形のものであつたのではないかと思われる。而して、先述のようにその本文は安楽寺本系天神縁起本文以外からの発生はありえないから、その本文を忠実に伝えている天理二巻本から諸本の本文が派生したと、いちはいえるように見える。

ここで注意しなければならないのは、天理二巻本が上

ABとDE、およびFは結局は同じことを別の表現でいつているのであるから、それら三種の関係についてはまず考えなければならぬ。ABとDEが類似し、Fがその二種とは全く違つてゐることは直ちに認められる。而して安楽寺本系天神縁起以外にはDEの詞章を生む本文を含む天神縁起は管見にふれたことがない以上、ABよりDEのほうが後出の形であろうことは肯定せざるを得ない。FをふくむBグループは、その叙述が簡略であり、Dにおいて見られた、「かも河」↓「しら河」、「車」↓「輿」の変化もなく、一見その発生を異にするのかの如くに見られるが、これも、Fを含む安楽寺本以外の系統の天神縁起の本文の存在は知らないし、また上述の二つの重大な変化のないことも、Bグループの本文が「天神本地」の初期の形態をもつ本文から派生したと想定すれば説明できないことはない。問題はむしろAグループ二本にCの部分が存在することが、AグループがCグループへの過渡的存在であることを意味するのか、それともCグループの本文(DE)に原初形態の安楽寺本系天神縁起本文を挿入したことを意味するのかという疑問である。これについて考えるためには、二つの点がまず明かにされねばならない。一つは、AグループとCグループと下巻とで本文の性質を異にすることである。すなわち、天理二巻本は上巻は原縁起と異つた、他のお伽草子本と類似した内容、詞章であるのに反し、下巻は法性房化現、宮中雷電、法性房渡河参内、淨藏祈禱(時平死亡)の諸段にわたり安楽寺本系天神縁起の本文に酷似し、他のお伽草子本諸本の本文とは内容、詞章ともに大いに異つてゐるのである。もし天理二巻本の上巻が、A・C両グループの本文と同程度または後出の形態を示す本文を持つならば、問題なく天理二巻本はとりあわせ本で、A・C両グループの諸本の祖本ではないと断言できるのであるが、上巻の本文は、実はA・Cグループよりは古形を保つ本文であるから、軽々しくそう断定できない。その先行性はたとえば次の二つのことでも証明できるのである。

(一) 和歌記載の形式、方法

天理二巻本は、和歌記載個所が本文中に四個所あるが、それらの個所では、和歌は、「岩といふ」の和歌が「なにごとも」の和歌と連記されている以外は一首ずつ記載され、その前に詞書的な説明の文章が付けられて居て、歌物語的な構成になつてゐる。これは原縁起と同じ方法である。

これに対し、Aグループの場合は、和歌の数が多く、それを三首ずつ記載するのであるが、それらのうち、天理二巻本にない和歌は多分に正体の怪しげなものが多い。たとえは

月日にせきをすゑざれば、木々の木ずゑも色づきて、
はなもよそおひのみえければ、みねのわかかなも、もえ出
て、さわらびもみゆらんとみえければ、

水そよぐ たるひの上の さはらびの もへ出るは
るに なりにけるかな

世の中の 人のこゝろの よしあしも 身のうきと
きぞ おもひしらるゝ

よひのまや みやこのそらに すみつらん 心つく
しの 秋のよの月

最初のもは志貴御子の和歌であり、最後のものは時季があわない。(もつとも桂林漫録の記すように「ありあけの月」とするならば必ずしも目立つ季外れにはならないが、詞書とは無関係であることにかわりはない)ここは天理二巻本の

かくて、つれづれのあまりに、都より手なれ給ひし琴をひきならし、あり明の空をながめて、
書のみや みやこの空にすみつらん

なつてゐるのは、やはりACグループの本文が天理二巻本の本文より後出の証左にできるであろう。(なお、Bグループの本文は対句形式は完備しているが、時平が家来を殺したプロットを挿みこんでいるので、両者の過渡的存在と見ることができる)

この他、お伽草子本独自のプロットである時平放火のプロットも、天理二巻本、秋月物語挿語では、伴大納言の放火事件——応天門ではなく、内裏に放火することになつてゐる——と時平が結合した形になつて居り、このプロットの原拠を示すものとして天理二巻本本文の先行を証拠づけるのではないかと思うが、村口本の二本ともが、この部分を佚亡しているので、積極的な証拠とはできない。

こうした、天理二巻本本文の先行を示す本文は少なくない。しかし、その反証となるかに見える場所がなくはない。それは菅丞相が法性房と別離を惜しむ場面である。天理二巻本では(Bグループも同様)菅丞相が比叡山に登山して別離を惜しむ構成をとるのに対し、Aグループ(村口本佚失)Cグループでは、法性房が「かちはだしのてい」で下向し、菅丞相と対面する構想をとり、「ながれゆく」の和歌を絵の中に記す点など、原縁起の覆

こゝろづくしの有明の月

という記述を、より原型的としなければならぬであろう。因みにBグループの本文は、詞書はAグループに類似しながら、その中心たる「岩そよぐ」の和歌を脱してゐる。一方Cグループの本文は、天理一巻本が「秋の夜」を「春の夜」に改めたほかは、すべてAグループの本文と同じである。従つて両グループとも天理二巻本より先行する形態は持つていない。

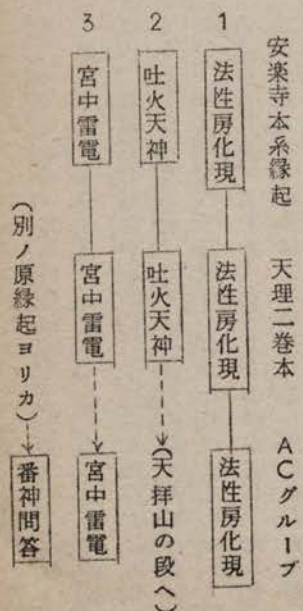
このような、和歌の複雑な増加や、記載形式の整備は、天理二巻本上巻の本文がABCの三グループの本文より先行の形態を保つてゐることを推定する裏付けになる。

(一) 比喩について

天理二巻本で、筑紫に着いた菅丞相を家来が見捨てて上京し、時平のおとどに迎合する個所に、「おんをしらざるものは、木にすむ鳥のゑだをからすがごとし、野にすむしかの、草をからすがごとし」という、やや頽れた形の対句形式(14)の比喩をもつて菅丞相が彼等の忘恩を歎く記述がある。これに対応するACグループの記述は、上京した家来を時平が殺したこと(天理二巻本にこの記述なし)に対する作者の評言として、この対句の前半だけが使用されている。こうしたややずれた使い方に

法皇段と類似した構想をとつてゐる。しかし、他に天理二巻本より原縁起に近い箇所はなく、この部分は原縁起に刺激されたための改変かと思われるから、決定的な反証とはなりえない。

要するに、天理二巻本の上巻はACグループより先行する本文を持つてゐることが肯定されるのであるが、とすると、先述のように下巻の本文は祖型なのか混雑なのかの判断は必ずしも安易に行いえない。特に下巻の細部に立ち入つて調査すると、その本文は必ずしも原縁起そのままの構成ではなく、かなりACグループのそれに近く、ACグループ本文の祖形に見えるのである。すなわち、原縁起との構成比較を表現すると左のようになる。



本文は、Bグループの本文をさらに刈りこんで本文を意味の判りやすいように整えてふえんした(S)ものと考えざるをえない。

要するに、天理二巻本の本文は、上巻の本文は少くともACグループの本文より先行し、下巻本文の末尾の部分は、ABC各グループのどれより先行する本文を持つことが判つたのであるが、そこで先に提出した疑問を解かねばならない。

たしかに、天理二巻本の下巻の文はお伽草子本の本文の構成と似て居り、その一部分はそのままAグループの文章になつて居る。しかし、私は天理二巻本の下巻本文は、お伽草子本文の非常に古い形のものに安楽寺本の本文を組合せたものだと思う。その理由は、第一に、上巻が安楽寺本系縁起の本文(天理二巻本下巻に最も近い本文を持つ赤木文庫本など)と全く異なるのに、下巻のみが、密着的に安楽寺本系縁起(赤木文庫本など)の本文に近いこと、第二に、伴大納言放火事件など、天理二巻本と同じ程度、或はより古い形を残した本文からの抄出とみられる秋月物語挿話に、一字千金などACグループと共通したプロットが存在するのに、天理二巻本下巻には全くそれが無いこと、第三番目に、右のような疑いは

○此左大臣しへいのおとどと申は、ささきのあにの、しゆじやくあんのおぢなり。これもちゑ、さいかく、人にすぐれてましませども、かんせうじやうにはおとり給ふ。(慶大本上巻)

(一) 一字千金のプロット

○大りのうへに、くろくもひきおゝみ、くわゑんと成てかゝらんとするを、そうじやう御らんじて、一じはこれせんきん成、一てんたしやうをたすくとゆふ、ほんもんあり、くわんおんは、しおんのために、ほうくわんにみだをいたゞきたもふ。一日のしをもおろそかにせされ、いわんや、たねんのしをや。たとひ、あくりやうをふくみ、天かをうらみ給ふとも、一どは、しにゆるしたまへとて、じゆずさらくともみ給へば、たちまち大りをしりぞき、てんかあんおんにぞ成にける。くつとゆふ一じをおしへ給ひしにおそれ給ふ。誠にありがたき御事成。(秋月物語挿話)(15)

○さて、そんいそうじやうは、だいにりへまいり、せんじゆほうをじゆし給へば、らいでんしばらくしづまりければ、人々すこしいきあがり、夜のあけたるとくなくなりけるに、又くろくもりすまきくだるほどに、そんいそうじやう、大おんあげてよばわりたまふ。いかにか

目で見ると、ここだけはお伽草子本全グループの本文に極めて近い末尾の文(原縁起からは極めて遠い)とその直前の浄蔵加持、時平死亡の記事との結合がいかに木に竹をついた隙に感じられることである。

しかし、右はいずれも消極的乃至は主観的根拠による判断であつて、異論をたてる可能性が無くはない。もつと積極的に、ABC三グループの、宮中雷電以降の本文の発生した根源が、同じ安楽寺本系ながら天理二巻本下巻の本文以外のものであることを証拠だてるものが必要であらう。今のところ、直ちにそれに結びつくものは見つけていない。しかし、それらしいものは一つ見ることができた。それは、慶応大学図書館蔵の三冊の奈良絵拔写本(横山重氏旧蔵)である。以下、この本と、お伽草子本の本文類似点を掲げる。(この場合、天理二巻本の上巻はお伽草子本の本文と認められるから、それをも引用する)(追記記載の広島大本も類似の本文を持つ。)

(一) 時平の紹介

○又、しへいのおとど、ばん大納言とてましくける。これもいみじきぎやう人にてましませ共、さいかくといひ、しいか、くわんげんのみちまでも、をとらせ給ひけるとかや。(天理二巻本)

んせうじやう、していのちぎりなりければ、一字千金にあたり、とありしかば、やがて、こがねせん両つゝみて、くろくものうちよりなげ給ふ。そんい、かさねてよばはり給ふ、一てんたしやうをたすくるとありければ、くろくも、四方へばつとちりて、せいてんのごとくなりければ、みかどゑいらんあつて……(慶大本中巻)

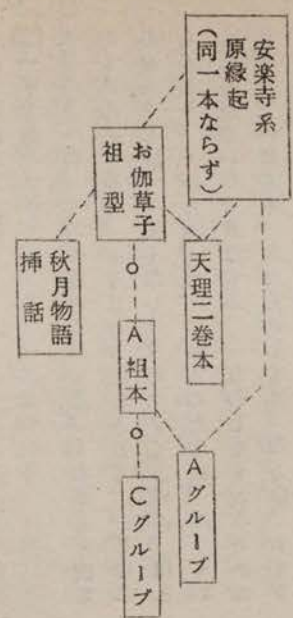
(安楽寺本系縁起ホカ全系統縁起コノ文無し)

ただし、慶大本からお伽草子本文が直ちに発生したのではない。両者は、本文上大きな差があり、また、お伽草子各本で右の(一)の前にある番神問答(弘安本系の縁起にあり)は慶大本には無い。従つて、この本の存在は、必ずしも積極的な証拠とはできないが、先に述べた三つの根拠の次に挙げうる根拠にはなりえよう。

右に縷々述べたことから、天理二巻本下巻は、お伽草子本文と安楽寺本系縁起の本文をおきかえたものと推定せざるをえない。とすると、Aグループの安楽寺本系縁起に近い部分(先述の法性房渡河段のCの部分)は、はたして古い形の残存なのか、後からの混入なのかは、改めて判断せざるをえない。私は、やはりこれも混入と判断すべきだと思う。それは、一つは、全プロットを通じ

この部分だけが孤立的に安楽寺本系の本文に酷似していること、この部分を除去すると、Aグループの本文はCグループの本文と過不足なく酷似すること、また、Cグループと共通の部分のうち「くるしかるまじき、たゞわたれ」（村口本、Dの末尾）と、安楽寺本系縁起の同文「たゞわたる（「ハハかる」ノ誤リカ）ことなく、こしをながるゝ水にのぞむべし」とは重複ぎみの感があるからである。

右を表にすると左のようになる。



では、今まで傍証的に扱ってきたBグループの本文は、右の表のどこに位置すべきか。さきに法性房渡河段でみたように、このグループの本文は、原本系、Aグループ、

云々と、「わすれても たけのやうじは」云々の二首である。これは、祖型本にあつたものではなく、このグループの祖本における補入であろう。

以上、祖型、A、B、Cの四グループ間の関係を推定してみたのであるが、各グループ内の諸本の関係については不明の点が多い。これはお伽草子に共通の困難であるが、以下右に述べられなかつた、諸本の特徴を列記しておきたいと思う。

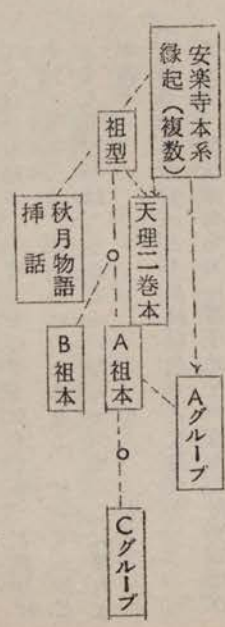
(一) 天理二巻本

天拝山の段で、祭文昇天、金札降下のプロットを欠く。このプロット（特に前者）は絵に画かれているから、二巻本の本文の省略・脱落と考えられる。

(二) 村口小型本・長谷川本

天拝山の段の文章を欠くほか、吐火天神の説話も欠く。一方、長谷川本は右の二つはあるが、流罪決定後の「さてもくも」云々の文章、「よひのまや」「時々仰彼蒼」の和歌・詩句を持たず、村口小型本特有の「わすれても」云々の和歌もない。従つて、両者は兄弟関係にある。なお村口小型本の絵は、大型絵巻の各場面の部分をとつてきて全体のプロポーションを考え

Cグループの本文と大幅に異なり、かつ古さが感じられたし、また巻末の文からも、AC両グループよりは古い本文を持つことが知られた。この二つのこと、および、天理二巻本にしか共通に存在しないプロットが他にも多い（たとえば、両張面のプロット——但、村口小型本この部分佚亡——とか、菅丞相流罪決定後の「さてもさてすがはらの大臣は、すごさぬよしをたび／＼申されしかども」云々の文章とか）ことから、このグループは、天理二巻本より新しく、A祖本より古い段階から別に発達した本と考えられる。すなわち、先述の表は左のように付加されるのである。



なお、Bグループには独特のプロットと和歌がある。それは「一文字」|| ネギ禁忌の理由であり、和歌は、「みるいしの」の次の「いざさらば なみだくらべん」

ず並べ、非現実的なものになつている。

(三) 刊本

村口本の出現により、この本はお伽草子本に安楽寺本系縁起などを混入せしめたものであることが明らかになつた。いま、その部分を指摘する。

室町時代物語集 第一の冒険行	文章の冒頭 末尾	他本の異同	出典
332 上 332 下 8	抑 みる 見有	村口本佚亡、諸本なし	安楽寺本系
333 下 18 334 上	ことさら ー かへりみしかな	諸本なし	原縁起（二致 本文なし）
334 下 8 335 下 5	夕されば ー 只鐘	安楽寺本系縁起	安楽寺本系縁起
336 下 5 336 下 15	あはれなるかな ー かぎりなし	〃	〃
337 上 5 337 上 11	さるほどに ー 御心うし候や	〃	渡唐天神伝説
337 上 12 337 下 5	またいかなる ー おほゆる	〃	安楽寺本系
337 下 13 337 下 17	我身のとが ー おほしめされける	〃	〃

判断の理由1先にふれたように、慶安整板本の本文も、絵柄も、村口本に酷似している。特に整板本第十七図上半の宣旨の使が法性房へ行く図は、整板本の他は村口本にしかない。従つて、刊本は、村口本系統の本に諸種の増補をしたことが明かである。(16)

四Cグループ諸本の関係

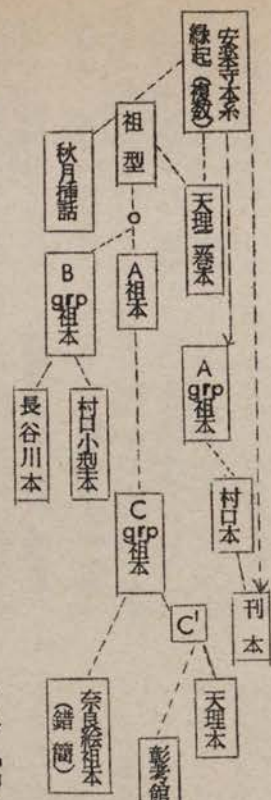
(ア) 絵巻二本の先後

天理一巻本に、まともて記載されている天神十二時御歌(子亥の折句)が、彰考館本絵巻では、分割して各個所に記されている。従つて、彰考館本の方が後出である。ただし、一字千金の個所で、彰考館本に「さても、おゝいてんもんの、わきの御とき、くつといふじを」の文を持つのは、村口小型本、長谷川本、秋月物語挿話から推定して、古いものの残存と思われる。従つて両者に直接の関係はない。ただし、絵柄は最後の社頭図などは共通する部分が多い。

(イ) 絵巻二本と奈良絵本群の関係

奈良絵本は、他のグループおよびCグループの絵巻二本にない、序文を付す。しかし十二時御歌は全くない。従つて、絵巻群とは別の祖本による。京大本が彰考館本より古い部分を残している事は、法性房渡河段のD

大本より後出であることは、形態、図柄からいへ、佐佐木本は本文も絵もひどく粗末になつて居り、最も新しいものである。
以上を図に示すと、左のようになる。



注

- (1) 「中世文学の形象と精神」(昭、十七)のちに「中世文学の形成と発展」(昭、三十二)に再録。
- (2) 「歴史における芸術と社会」(昭、三十五)所収。
- (3) 未見。「日本文学史」中世(至文堂刊)神道集の解説中に記載。
- (4) 一条兼冬は天文二十三年(一五五四)二十六歳で死亡。土佐千代女光久は土佐光信の女、狩野元信の妻。
- (5) 「国華」第六拾八編第拾貳冊、四五六頁、四九九頁。

D2, E1/E3の部分が、彰考館本だけ欠けていることで判る。

(ウ) 奈良絵本諸本の先後

これらは、「さるほどに、此そら、わか山ゆぶきがただけ、あたご山をもをしこめて、みやこはくれのやみとなりぬれば」の本文(宮中雷電の冒頭)を法性房参内のあとに付するという錯簡がある。(但、東大本は下巻欠)それらの錯簡をたどると、京大本が最も先行することがいえる。というのは、この錯簡の文が、京大本では丁の途中ではあるが、行頭からはじまり、この三行と、つづく絵(第十四図)を本来の位置にもどすと、天理一巻本の本文、絵の位置、図柄と一致するの、佐佐木本は、錯簡本文が行頭に来ず、絵も省略されているからである。また、赤井氏の、書体、作風から推定されたように(17)、京大本は初期奈良絵本の形態をとることからも、この事は推定されるし、配流船上の図で、天理二巻本から京大本までは帆船が画かれているのに、東大本、高安博士旧蔵本(戦災焼失、室町時代物語集の付録による)佐佐木本では伝馬船に簡略化されていることから推定される。
なお、東大本の本文は京大本と酷似しているが、京

- (6) 「神道物語集」(昭、三十六)五六五頁。
- (7) 「天神縁起絵巻の終焉」(注2の論文)200頁。以下同論文は「終焉」と略称させて頂く。
- (8) 「終焉」201頁。
- (9) 「終焉」200頁。
- (10) 以下以用の本文は、私に濁点、句読点を付した。
- (11) 「国華」第四拾五編第八冊所収。
- (12) 「神道集巻第九『北野天神事』ノート(一)」(名古屋大学国語国文学17)76-77頁。
- (13) 「神道物語集」二二九-二三二頁。ただし、印刷

上の制約により、フリ仮名は誤読のおそれのないものは全部省略せざるをえなかつた。

(14) 「おんをかうぶりて、おんをしらざるは、うへ木のとのり、えだをからすがとし、とくをかうぶりて、とくをしらぬは、野のしかの、くさをからすがとし」(村口小型本)

(15) 「室町時代物語集」第三、一九五頁。

(16) この事については、村口本を見るまえに「天神御本地考」(名古屋大学国語国文学3)で推定したことがある。

(17) 注8参照。

(静岡県立女子短大講師)

追記… 本日29頁に記した広島大学国語国文学教室蔵「天神之御本地」のフィルムを頂いた。該本は安楽寺本系北野天神縁起の内、慶大本と同一系統に属するもの(やや先行する)で、お伽草子ではなかつた。しかし、38頁に記したように、この系統の本文は、お伽草子へ頼れてゆく過渡のものとして注意されるもので、その一本を加え得たことは多大の喜びとするところである。広島大学図書館及び名古屋大学図書館当局に感謝すると共に、小生の怠惰と不明とを恥じるものである。

(四十一年六月九日 記)

北条団水の三千風追悼文と鳴弦之書

岡 本 勝

一、はじめに

大淀三千風は、寛永十六年勢州飯野郡射和村(現在、三重県松阪市射和)の商家に生まれ、宝永四年一月八日郷里射和村に六十九歳を一期としてその生涯を閉じた。しかし、寛文九年から天和三年までの十五年にわたる仙台居住、天和三年四月から元禄三年まで七年におよぶ「日本行脚文集」の旅、晩年の大磯嶋立庵での生活と生涯の大半を異郷に過し、郷里に在ることが少なかつたので、ともすると、比較的そこに留まることの長期にわたる故をもつて、又、その地で彼の生涯において最もはなやかな出来事である三千句独吟が試みられたということによつて、「仙台の三千風」と記憶されることが多かつたのである。だが、郷里射和には三千風の墓や過去帳、三千風関係の資料が今なお若干残つており、三千風研究にはまず射和に残る資料の調査が必要だろふと思われる。近時私は、西鶴の周辺の俳人の一人として、又西鶴と

ほとんど時を同じくする一地方俳人として大淀三千風に興味をもち、射和にある三千風関係資料の調査をはじめたのであるが、その調査中、はからずも団水の署名をもつ三千風追悼文を発見した。小奉書(縦三十三種、横四十五種)一枚の短い文章であるが、文中俳諧史にかかわりをもつ部分もあるので、その全文をここに紹介し、いささか私見を述べてみたいと思う。

二、団水の三千風追悼文

聞

計音 綴轆譚并滑稽一句

先生三千風ハそのほりかねのおよすけにしてむくつきき我にまてねもころにいつくしまれもとより此道の先達にていとたのもしき諫めおほき中にはかりなき飲酒せしをたゞ器ひとつにさためよとせあまりはや七とせのまへにしめされしより花農月夕さかつきとることに忘るゝ事なくあはて過にしとし月もその一言ゆへ